《弓争い・競べ弓①》

帥殿（伊周）が南の院で人々を集めて弓の競射をなさった時に
帥殿の、南院にて人々集めて弓あそばししに、

この殿（道長）がおいでになったので
この殿わたらせ給へれば、

思いも書けない不思議なことだと、中関白（道隆）はお驚きになって
「思ひかけずあやし。」と、中関白殿思し驚きて、

たいそうご機嫌をおとり申し上げなさって
いみじう饗応し申させ給うて、

（道長公は伊周公より）地位が低くていらっしゃったのに
（競射の順番を）前にお立て申し上げて、
下臈におはしませど、前に立て奉りて、

先に射させ申しあげなさったところ
まづ射させ奉らせ給ひけるに、

帥殿の的中した矢の数がもう二本負けておしまいになりました。
帥殿の矢数いま二つ劣り給ひぬ。

《弓争い・競べ弓②》

中関白殿も、また御前にお仕えしている人々も
中関白殿、また御前に候ふ人々も、

「もう二回（勝負を）延長なさいませ」
「いま二度延べさせ給へ。」

と申し上げて、延長なさったので
と申して、延べさせ給ひけるを、

（道長公は）不愉快に思いになって、
安からず思しなりて、

「それならば、延長なさいませ。」
「さらば、延べさせ給へ。」

とおっしゃって、また射なさろうとしておっしゃるには
と仰せられて、また射させ給ふとて仰せらるるやう、

と「この道長の家から帝や、后がお立ちなさるはずのものならば、この矢当たれ。」
「道長が家より帝・后立ち給ふべきものならば、この矢当たれ。」

とおっしゃ（って矢を放たれ）ると、同じ当たるといってもなんと的の真ん中に
当たったではありませんか。

と仰せらるるに、同じものを中心には当たるものかは。

《弓争い・競べ弓③》

次に帥殿が射なさったところ、たいそう気後れなさって
次に、帥殿射給ふに、いみじう臆し給ひて、

御手も震えたせいでしょうか、
御手もわななく故にや、

（矢は）的のそばにさえ近く寄らず
的のあたりにだに近く寄らず、

見当違いの方向を射なさったので、関白殿は、顔色が青くなってしまった。
無辺世界を射給へるに、関白殿、色青くなりぬ。

さらにまた、入道殿（道長）が射なさろうとして、
また、入道殿射給ふとて、

「（自分が）摂政や関白になるはずのものならば、この矢当たれ。」
「摂政・関白すべきものならば、この矢当たれ。」

とおっしゃ（って矢を放たれ）ると、前と同じように、的が割れるほど
と仰せらるるに、初めの同じやうに、的の破るばかり、

同じ所を射当てなさいました。
同じところに射させ給ひつ。

《弓争い・競べ弓④》

（道隆公が道長公の）ご機嫌をとり、おもてなし申し上げなさった興も冷めて
饗応し、もてはやし聞こえさせ給ひつる興もさめて、

気まずくなってしまった。
こと苦うなりぬ。

父大臣（道隆）は、帥殿（伊周）に
父大臣、帥殿に、

「どうして射るのか。射るな、射るな。」
「何か射る。な射そ、な射そ。」

とお止めになって、（すっかり座が）しらけてしまった。
と制し給ひて、ことさめにけり。